

別れ — 生を確かなものにする

佐藤 俊一[※]

多くの人たちは、別れを関係の終わりとして捉え、避けようとしている。しかし、必ず別れは訪れる。したがって、別れに対してどのような態度をとるかで、私たちの生が問われることになる。

上記の課題に取り組むために、別れの前提とされる出会いとの関係、特に再会を検討することで出会いと別れの時間軸の発想を問い直すことを行う。続いて、別れに対する日本人と欧米人の自然的態度のちがいを、別れと喪失という体験的概念をキーワードとして明らかにしていく。

自然的態度を括弧入れするという現象学的還元から別れを苦悩して断念する体験として捉え、人間的体験として基礎づける。こうした試みから、別れは私たちの存在を揺さぶるスピリチュアルな体験であり、同時に生を確かなものにすることを論証している。

キーワード：再会，時間軸，自然的態度，喪失，断念する

出会いは、私たちにとって楽しみであり、同時に不安でもある。4月に大学に入学したある女子学生の例から考えてみよう。彼女は、それまでの人間関係から離れて新たな出発をしようと決めていた。というのは、高校時代に部活の仲間との間で、ちょっとした行き違いから仲間外れにされた体験があったからだ。ひどく落ち込んで、一人でどうしたらいいか悩むことが続いた。本当は、自分の気持ちを相手に伝えて、お互いに理解できるようになればよかったのだが、気持ちを伝える勇気がなくて離れ離れになってしまった。こうしたことを繰り返したくないと思っていた。

この学生だけでなく、他の新入生も事情は異なれ、入学した大学において生涯の友となる人との出会いを望んでいる人がいるだろう。ここで少し立ち止まってみよう。出会うという新しい出来事を体験するためには、本人が自覚している、していないにかかわらず、学生たちは今までの関係や自分自身と別れることになる。正確に表現すれば、新たな友と出会うことで、高校時代の私と別れるのである。当然のことだが、これまでの自分に頼らないことで不安になるが、別れの中でしか新たな出会いは生まれない。

※ 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

他方で、多くの人たちは別れを望まない。なぜなら、別れは終わりでもあるからだ。自分にとって大切な人との関係が終わりを迎えないように気をつけて、嫌われないように、壊れないようにする。このように事前に準備することで別れを避けようとする。しかし、相手が誰であっても、別れは必ず訪れる。その時、別れをどのように受けとめるかで、お互いの関係がハッキリする瞬間になる。したがって、別れは私たちが生きていく上で、貴重な人間的体験である。

もう一つ着目したいのが、別れという体験は日本の独自の文化を表している面があり、西欧人の感覚とは異なるという点である。対象が人であれ、モノであっても、私たち日本人にとっては、関係から親しい人が去っていく、モノが無くなると、関係における私が無くなる受けとめ方をする。あるいは、自分だけが関係の中に取り残されるという感覚である。いずれにしろ、別れが関係から始まっている。その背景には、出会いがどのように起こるかというテーマがあり、個を出発点に置く欧米の文化における捉え方とは異なるものがある¹⁾。本稿においては、両者のちがいを明確化し、別れがあることで私たちの生が確かなものになるということを論証していきたい。

1. 別れを出会いとの関係から基礎づける

(1) 再び出会う

出会うということを聞くと、多く的人是は初対面の場面をイメージするだろう。初めて会う相手が、どんな人かと想像し、楽しみと不安を抱く。ところが、私たちの生活を見ていくと、実際には同じ相手に会っていることが日常である。また、久しぶりの同窓会で昔の友に会って、何も変わってないと感じたり、反対にそれまで気づけなかった面に触れて改めて出会うこともある。後者だけでなく、前者の頻繁に会っている人でも、再会することになるのだが、その機会が出会いと別れの関係を検討するのにわかりやすい。具体的な例から検討してみよう。

地域活動支援センターに勤務するソーシャルワーカーのAさん(男性)は、介入されることに拒否的な態度をとる相手を苦手としていた。今回悩んだのはクライアント本人ではなく、熱心に娘の世話をする彼女の母親であった。家庭で十分に面倒を見ていると母親は言うのだが、クライアントが通っている生活介護事業者からは本当に大丈夫なのかと不安の声が上がっていた。しかし、家庭を訪問して母親と話す、「自分の子どものことは自分たちで面倒みる」と言われ、その拒否的な態度にかかわりにくさを感じていた。また、将来のことを考えると、親が亡くなった後のクライアントのことが心配だった。

そうした中で、相手のことや生活を知りたいという思いから、特に用事が無くても訪ねるようにしていた。ある日、母親は自身の悩み事があったのか、いつもより弱気な態度が見られ、短期入所や施設入所について聞いてきた。また、「親が大変な思いをして自分の子どもの面倒をみているのに、施設ではたくさんの人の世話をするのだろうか。それはもっと大変なことで、できない

から虐待事件が起こるのではないか。」と話された。それを聴いて、Aさんは、この時初めて子どものことを心配する母親の気持ちを感じた。気がつくと、「大切な娘さんだから心配ですよ」と声をかけていた。

今まで冷たいと思っていた母親に対して、Aさんは温かみを感じるようになった。彼にとってみると、母親との距離が縮まり、関係が動いたわけである。つまり、固定していたかかわりにくさの地点に止まるのではなく、母親の気持ちが動き、それに彼が応じたことで新たな出会いが生まれたのである。不思議なことに援助者の働きかけから起こったことではなかった。他方で、Aさんが苦手な人だと思いつつも逃げないで訪問していたからである。したがって、再び出会えたことは、両者のかかわりから可能になったのである。

ここで少し整理してみよう。これまで母親とAさんは出会っているのだが、その関係は居心地が悪いものだった。しかし、このようにお互いの存在を大切にできるように再び出会うことができるし、また今後も新たな関係が生まれる出会いの可能性に開かれている。併せて、再び出会うとは、以前の関係から動いていることである。

(2) 時間軸という発想への問い

別れを研究するにあたって、最初に出会いを示した。しかも初対面の出会ではなく、再会というテーマをとりあげた。例でもみたようにソーシャルワーカーのAさんとクライアントの母親は再び出会っているのだが、そこには以前の関係があり、両者が以前の関係に別れを告げていることがわかる。以前の関係から別れなければ、新たな出会いは生まれない。同時にAさんは介入に拒否的な態度をとる人を苦手としているのだが、かかわり続けることで母親との関係が動き自分へ自由になっている。やはり、それまでの自分へ別れることができたのである。

出会うというイメージは、新しく得たり、広がるというものがあるが、実は別れたり、捨てることによって可能となっている。つまり、出会うためには、それまでの関係や自分と別れることが前提となっているのである。

出会いには別れが必然的に伴うことを確認した。さらにそのことは、一般的な時計時間²⁾で考える両者の関係に疑問を呈することになる。多くの方は、時間軸として出会いが先にあり、その後別れがあるという発想をする。ところが、両者が同時に起こることをすでに指摘した。さらに厳密にみていくと、出会うためには、別れることが先に必要だということがわかる。前のままの関係でいれば、新たに出会うことはできない。

出会うときには、その直前の瞬間に別れているのであるが、当然のことだが当事者は気づくことができない。先の事例においても、そうだった。母親は冷たい人から温かい人へ変わったのだが、冷たい人という受けとめ方に別れをつげないと、温かい人にはならない。意図的に変えたのではなく、気づいたら変わっていたのである。したがって、Aさんに以前の関係と別れたという

自覚はないことがわかる。

この時計軸での順番と逆転することが、別れの体験を神秘的なものにする。思いもよらない別れがあり、出会いも生まれる。自分の意志を超えたところで起こっているのである。私たちは別れの体験によって喪失や悲しみを味わっているのであり、紛れもなく私たちの生きる世界におけるかかわりを示しているのである。したがって、他者や自分と出会うことで私たちは自分になることができるのだが、同時に別れることで自分らしさを生みだすことができるのである。別れがスピリチュアルな体験だと理解することができよう。

このように考えると、別れの研究が、出会いとの関係を抜きにできないことが明らかになる。そのため、次に出会いに対して私たちが日常とっている自然的態度³⁾を明らかにしてみたい。出会いをどのように受けとめ、考えているのか。そのことが別れに対する態度に大きくかかわるからである。また、このようなアプローチにおいて、私たちは出会いや別れといった人間的体験において、他者や自分自身を大切にできているかが問われることになる。

2. 別れと出会いにおける私たち

(1) 文化による出会いのちがひ

冒頭的女子学生の例だけでなく、私たち日本人にとって出会いとは、始まり、楽しみ、期待などプラスのイメージが強い。また、日常の生活においても出会いということは身近にあって、多くの人が体験してきていることだと理解されているだろう。それだけでなく、興味深いのは「邂逅」⁴⁾ということばに示されているように、私たちは、偶然にめぐり会うといったことを大切にしたり、無意識に求めている。それに対して、別れにプラスのイメージを持つ人は少ない。「出会いは別れの始まり」「生まれた時から死に向かって生きている」ということは頭では知っていても、終わり、辛い、避けたいといったマイナスのとらえ方になってしまう。そして、求めているにもかかわらず、別れが突然に訪れて耐え難いものになる。

上記のような出会いや別れに対するイメージとは、一つには人間の理解についての表れのちがひとして捉えることができよう。ことばを例に考えてみよう。私たちは日本語を母語⁵⁾として使うが、主語を明示せずに、または時と場合によって主語を変えることによって、相手（部下と上司、友達、家族など）との関係に気遣い、関係を維持しようとする態度をとる。個々ではなく、状況を重視した態度をとっている。そうしたことから、出会うとは関係を新たに作るということであるのに、あたかもすでに関係がある、あるいはすぐに作らなければならない、作れるものという発想になる。そして、老若男女にかかわらず、私たち日本人は、よい人間関係を求めている。

関係を起点とした人間の理解は、私たち日本人が人間を理解するときの基本となっている。また、関係が成立するためには、お互いの共通することと、ちがうことが必要になる。なぜなら、

出会いにおける関係

図1-1 (日本的な出会い) 親和

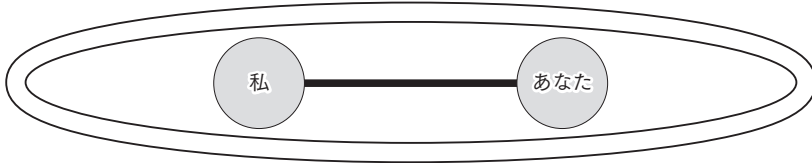
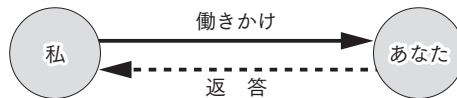


図1-2 (欧米的な出会い) 対抗



2人が全く同じならば同一ということで一つのものになり、ちがうだけなら無関係になる。先のよい人間関係、波風を立てない〈つながり〉を重視した態度だと言うことができよう。つまり、個より関係を優先するのだが、その実態とは〈つながり〉に着目することで、両者の間にあたかも〈ちがひ〉がない、一つのものかのような関係を求めることが自然的態度になっているのである(図1-1)。そのため、日本人にとって出会いとは難しいことではなく、機会さえあればいつでも可能だと多くの人は考える。

同様のことを、精神科医の小林司は、「日本語の『出会い』に使われる『あう』という字は、合、会、逢、遭、遇、いずれも『あう』と読み、この『あう』は、モノとモノ、コトとコト、人と人が一つになって、物理的にも距離がなくなるという意味である(傍点筆者)」(小林 1983:47)と指摘する。それに対して個を出発点とする欧米においては、出会いを表す英語の encounter や仏語の rencontre の場合には、「反対に、対抗してなど二者の間に強い緊張—対立が存在し、(日本語の) 出会いの場合にはむしろ親和—充足が存在するといってもよい(カッコ内筆者)」(早坂 1991:129-131)と現象学的人間学を探究した早坂泰次郎は指摘する。さらに小林は、仏語の出会いとは、「二人の人間が対面しているのであって、一つになるとか合うという意味が薄い」こと、日本人の感覚のように「二人がいっしょになってしまうことはない」(小林 1983:47)と示している。つまり一つになることではないのである(図1-2)。

こうして出会いに対する文化的なちがいが、別れにおいても大きく関係している。なぜなら、ここまで示してきたように出会いと別れとは切っても切れない関係にあり、別れることによって新たな出会いが起こるからである。

(2) 日本人にとっての別れ…関係に取り残される

日本的な出会いと欧米的な出会いを両者の自然的な態度に焦点を当て示してきた。当然のこと

だが、こうした出会いにおける関係を前提にして、別れが捉えられることになる。

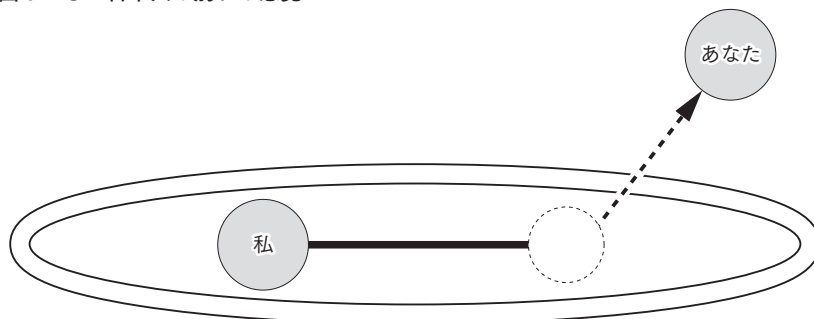
まず、日本的な出会いから別れを検討してみよう。究極的な別れである親しい相手との死別においては、これまで二重線の中で親密な関係にいた「あなた」がいなくなってしまう。「私」は二重線の中の関係に留まり、別れを受けとめることになる。しかし、「あなた」が不在になってしまったことは埋めることができず、私は一人ぼっちで取り残されることになる。今まで満たされていたものが、欠けてしまっている状態になるのだが、相手の存在が大きいほど、また大切な人であればあるほど、ぽっかり空いた穴が大きく感じる（図1-3）。

これまで筆者もそうしたことを体験したり、目撃したりしてきた。たとえば、告別式のお別れの挨拶の時のことだ。ある人は、自分にとって師にあたるような女が亡くなったときに、「まだ先生から学びたかった、予定していた研修の時に予約したホテルの部屋は、まだそのままになっていますよ」と涙ながらに弔辞を述べた。そうした発言は、一見すると亡くなった相手がとても大切に別れられないと言っているように聞こえる。しかし、その底にある気持ちは、今までの関係の中に相手がいなくなり、寂しくて仕方がないと言っていることになる。つまり、別れられないのである。そして、私が耐えられないのである。

別れにおいて、それまでの関係がハッキリする。お互いを大切にできていれば、別れは悲しいが、スッキリと別れることができる。反対に、何か引っかかっているものがあると、別れることに抵抗が生まれる。つまり、先に示したお互いがどのように出会っているかが、問われているのである。最終的に、別れることでわかるのだが、関係を真正面から見たくないという気持ちが強いと、余計に別れを避けたいと思うのである。

では、どうしたらいいのだろうか。相手がいなくなったのだから、私も関係の外に出ればいい。しかし、それは冷たい態度のように思ってしまうのである。あるいは不義理と日本的な感覚で受け取ってしまうのかもしれない。しかし、亡くなった人から見れば、「私との関係を大切にしたいならば、むしろ私のことは忘れて、あなたが出会う人を大切にしたい」と思っているだろう。それをできることが、故人との関係を大切にすることになるのである。

図1-3 日本人の別れの感覚



(3) 欧米人にとっての別れ…対象の喪失

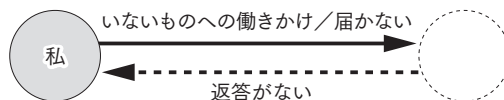
個を出発点とする文化においては、**出会**いは、**私**が**他者**に働きかけることによって起こることである。したがって、自分とは異なる**対象**に接する態度だということが基本になることを確認してきた。先に示した早坂の言う、二者の間に強い緊張—対立が存在するという事は、まさしく両者が対象として留まっていることを表している。したがって、日本的な出会いにおけるつながり、あるいは関係の中であって一つになることとは異なる。

では、別れについてはどうだろうか。ここでは死とその過程について探究したキューブラ・ロス (E. Kübler-Ross) と弟子のデーヴィッド・ケスラー (David Kessler) による労作 On Grief & Grieving (邦訳『永遠の別れ』) を参考にしながら考えてみたい。この著作においては、すでに広く知られている死にゆく人の心の五段階 (否認・怒り・取引・抑うつ・受容) ではなく、近親者が愛する人の死 (悲嘆) に対して同じような心の段階を辿ることを示されている。したがって、残された者からアプローチすることが、別れを研究するに役立つと考えたわけである。

最初の段階である「否認」において、次のように述べられている。「悲嘆のプロセスにおける否認という感情は重要なものである。それは意識的・無意識的精神生活によって作られた防衛メカニズムである。もし喪失 (loss) にまつわる感情がすべて一度に襲ってきたら、それに圧倒されてしまい、とても耐えきれぬものではない」(Kübler-Ross/D.Kessler=2007:33) と喪失を抱えながら生きる人の大変さを的確に指摘している。ここで示されているように、悲嘆のプロセスの中に出てくることの基本にあるのは、**対象の喪失**である (図1-4)。当然のことだが、対象はいないので、こちらからの働きかけは届かないし、相手からの返答はない。この返答が無いということが受け入れられぬのである。

さらに悲しみの内側と外側から、〈喪失〉についてさまざまな体験が記述されている。その後、に特殊な喪失の体験として、子ども、災害、自殺、急死などが示されている。結びの「悲嘆という贈り物」というところで、「人は永久に悲しみ続ける。それが現実である。愛する人の喪失に打ち勝つのではない。喪失とともに生きることを学ぶのだ」(Kübler-Ross/David Kessler=2007:379) と強調されている。また、その喪失による恐れや絶望に悲嘆が大きな役割を果たすことになる。つまり、悲嘆することで人生を最後まで完成させることができると著者たちは言うのである。この悲嘆の中から逃げるのではなく、その中で生きることを学ぶということは、文化のちがいがあっても共通して避けられることが多くあるので、正しく理解される必要がある。

図1-4 欧米人の別れの感覚



このロスとケスラーの著作は、私たちに日本人にとっても死別をどのように受けとめ生きたらいいのかについて多くの示唆を与えてくれている。他方で、対象を喪失するという観点を強調する視点には異なる感覚を抱くことになる。そこには、ある個人が、この場合には残された者が主体となり、亡くなられた人を対象として捉え、対象が不在となったことを悲しむのである。出会いにおいてお互いが対象であったことから、別れにおいても、やはり対象でのままであり、対象を失うことになるのだろう。したがって、別れという表現はほとんど見出されず、〈喪失〉ということばがキーワードになっている。

3. 別れが私たちにもたらすもの

(1) お互いの動きとしての別れ

日本人の別れと欧米人における喪失のちがいについて概観した。特徴的なことは、〈別れ〉によって私に関係に取り残されることで、関係が成り立たなくなる、あるいは壊れるということにある。つまり、そこで問われているのは、私だけでなく、関係である。それに対して、〈喪失〉とは、私との関係にあったもの、あるいは持っている対象がなくなってしまうという体験である。ポイントは、対象を喪失することで私が悲嘆し、私がかげがえのない存在を失ったことをどのように受け入れるかが問われていることである。

まず、欧米人の感覚における自分が主体となって対象との関係を作るということを検証してみよう。彼らが、他者やものを対象として捉えるとき、〈名詞〉のかたちになるし、ならざるを得ない。喪失 (loss) の対象とは妻、夫、親、子、友人であり、裏返せば、それまで対象として持っている (have) という感覚を示していると言える。このように指摘すれば、多くの人は違和感を覚えるだろう。私は「大切な人を持っている、所有している」のではなく、ともに生きている (being) のである。ところが、フロム (Fromm, E.) は、持つ態度を問いかける中で、「過去二、三世紀のうちに西洋の諸言語における名詞の使用が多くなり、動詞の使用が少なくなった」こと。そのことに関連づけて、「過程や能動性は所有されるものではなく、ただ経験されるのみだからである。」(Fromm=1977:40) と指摘する。また、早坂は言語学者池上嘉彦や柳父章を引用しながら、「英語において頭痛がするは、I have a headache と表現されるが、日本語では決してこのように言わない」(早坂 1991:147-148) として、名詞を中心に置かれることで、have という動詞が必要になると示している。そうしたことは、喪失としての別れの体験が、あくまでも残された私が失った対象に対して一人で行うものという理解につながる。しかし、ロスたちもそのプロセスで示しているように、残された者が揺さぶられ、亡くなった相手との関係も動いていることが起こる。そこには、日本人があたりまえに抱く〈別れ〉をどのようにするかということがやはり問われているのであろう。

前記のような特徴は、別れの体験が相手との共同から生まれる動きを表していると感じさせてくれる。フロムが指摘するように能動性や過程を示すのは動詞であり、別れを体験する中での個々の動きとなって表れる。動きだからこそ、それまで見えなかったことが表れる。別れをやむを得ないことと受けとめることもあるだろうし、主体的に体験することもできる。そうした動きを、お互いがどのように受けとめるかだ。別れは単に終わりではなく、それまでの両者の関係をハッキリさせ、問いかける機会ともなる。別れがなければ気づけなかったことや相手のことが見えるようになるのである。あるいは、相手の全体の見え方が変わると言ってもいいだろう。そうになると、いつか別れなければならないという不安だけでなく、どのように別れるかでお互いの独自性を尊重できるかということになる。

このように検討すると、別れとは均一なものではなく、同じ相手との別れであっても、一回・一回が異なることがわかる。それゆえに、どのように別れるかがお互いの今をどのように生きているかを表しており、同時に将来の生きざまの決意を示していることにもなる。動きであることは、単純にそれまでの延長として別れがあることにはならない。今までよかった関係のどんでん返しもあるだろうし、思いがけずに幸せな気持ちになれる体験もある。したがって、別れは悲しい終わりとしてだけでなく、希望や誕生としても受けとめることができる。別れが、それまで持っているものやあったものの喪失だけではなく、お互いがどのように体験するかという動きから生まれる一人ひとりの可能性を示しているのだと言えよう。

(2) 関係的存在を再確認する別れ

これまで日本と西欧の出会いと別れを検討する中で、それぞれに見られる自然的態度⁶⁾を取り上げてきた。そのことは、別れという現象をありのまま見ようとするときに必要なプロセスであった。ここでは、そうした日常的な態度を括弧入れすることで、別れが人間的体験として示していることを文化のちがいと関係なく明確にしていきたい。

これまで示してきたように個を中心とした喪失とは異なり、別れは関係を基本としている。その意味で日本人には近づきやすく、理解しやすい。ところが、日本人にとっての別れで確認したように、関係的存在であることが正しく理解されておらず、むしろ関係に個が隠されていると言った方が適切であろう。そのため状況本位であり、曖昧さを求めており、個々のちがいをハッキリさせないののである。当然のことだが、別れもそうした態度の延長上に捉えられてしまうことが多い。早坂は、そうした態度を「原始的素朴さ」と呼び、「洗練された素朴さ」に鍛えあげる必要があると指摘する。(早坂 1991:133) 現象学的に別れというテーマに取り組むために、出会いから始まる日本人の関係に対する態度を改めて問いかけることで、別れの概念の基礎づけを試みてみたい。

私たちは、これまで人間が関係的存在であることを〈関係性 (relatedness)〉と呼び、その理

由をいろいろな機会に示してきた⁷⁾。具体的には、「人は一人で生きられない」のではなく、「もともと、一人では生きていない」ということにある。多くの場合に、前者の一人で生きられないが、日本人の関係理解になっている。一人では生きられない人は、誰かを必要として自分が生きるための手段とする。そして、相手を手放さないようにして、自分が一人ぼっちにならないようにする。当然のことだが、別れは耐え難いものになる。出会いから始まって、別れに至る中で、関係を常に気にして維持しようとしているのだが、それは自分のためだけに行っているのであり、相手を、そして自分を大切にすることにはならない。そして、別れは、お互いを大切にできる最後のチャンスなのだが、それを逃してしまうことになる。

関係性として、一人では生きていないということに気づくことできる人は、出会いとの時から個々のちがいを尊重することができる。私たちは、相手とのちがいに会うのである。もちろん、常にできるとは限らない。相手をこんな人だと対象としてしか理解できず、「今・ここで」の関係を生きられなくなってしまうことは日常茶飯事である。しかし、誠実に生きようとするれば、私たちは失敗や誤りを繰り返すことでお互いのことが見えるようになる。言い換えれば、別れや出会いを体験する中でしか相手のことを大切にする方法は見つからないし、永遠に正解は見つからない。そうした中で、相手の個別性を尊重することができるようになる。そして、一人ひとりが関係性を生きていることを発見できることになる。別れによって物理的に一人になったとしても、関係性を生きていることは続いており、逆に別れが関係性の発見にもなる。つまり、別れにおいて、ちがいを再確認できるのである。

ここで出会いと同様に別れについても英語表記についても触れながら、別れた後で個々がどのようなのかについても補足的に考えてみたい。ちなみに英語に示されている表現で、別れを示す一つのグループとして parting や separation といった単語を見つけることができる⁸⁾。そうした言葉からは、それまで全体としてあったものが、どちらかが欠けることで一部分に戻ってしまうというイメージを思い浮かべる。しかし、単に部分に戻ってしまうことだけなのだろうか。そこには、出会いにおける両者の関係が前提となっていることを見つけることができる。つまり、出会いにおいて、私とあなたは対抗した関係にあるので、日本人の出会いのように一つのものとなっていない。個は個として保たれているので、別れにおいて個に戻るといったイメージなるのだろう。しかし、これまで示してきたように関係的生における別れとは、お互いが出会う以前の個とは異なる存在であること、また別れによって個がより独自性や個性を身につけられる機会になることを確認しておく必要があるだろう。もちろん、自然的態度によって一つになるということが出会いの本来の姿ではなく、個と個がお互いを大切にすることが、出会いや別れを通して実現することを一貫して追及しているのである。

(3) スピリチュアルな体験としての別れ

別れが人間的体験であるということを基礎に置き、主体としての私が大切な対象を喪失するだけではなく、お互いの動きであることを示した。続いて、関係的存在として私たちが別れにおいて関係性を再発見する機会になることを論じた。そうしたことを前提として、私たちは別れに対してどんな態度をとるのか、別れの決断が人間的体験としてもたらずものを明確にしてみたい。

自身の愛する人、大切な人と別れることは、死別であれ、生別であれ辛い、悲しい出来事である。これまでと同じように一緒にいたい、私の話を聴いてもらいたいと思うのだが、相手がいないという現実を突きつけられる。場合によっては、街を歩いていると、前にいる人を別れた相手と錯覚することもある。夜一人になると、いろいろなことが思い出され、苦しくて眠れなくなることもある。こうして相手が大切な人であればあるほど傷口はふさがらず痛みは大きくなり、苦悩することになる。別れは苦悩をもたらすのだが、そのとき、私たちが苦悩に対してどのような態度をとるかが問われている。苦悩から逃げれば、別れは辛いだけの体験となってしまう。苦悩と向き合うことができれば、その体験はそれまでの私を超えるものとなる。つまり、一人ひとりのスピリチュアリティを動かし、私を覚醒させる体験になるのである。

具体的には、どうすればよいのだろうか。自らの強制収容所の体験から「意味への意志」を提唱するフランクル (Frankl, V.) は、「毅然とした苦悩は業績である」(Frankl=2004:125) と強調する。あるリトル病 (脳性小児麻痺) の患者を例にして、その人は健常者が体験することが何もできないこと、従来の個人心理学の図式に従った自己実現の可能性のからすべて撤退を強いられたと示す。同時に徹底的に撤退することで、新たな挑戦ができた。そのプロセスを、フランクルは、「『断念』を『成し遂げた』(業績とした)」(Frankl=2004:12-129) と呼ぶのである。断念できることが業績だと言い、断念することで新たな生きる価値を実現できたとする。

この断念するという態度を用いて、別れの積極的な意義を検証してみたい。私たちは、簡単に別れを断念することができない。まだ何とかなると考え、こうすればよかったと執着してしまう。簡単に忘れられない。ところが、断念するとは、単に忘れてたり、手離すことではなく、自分がしたこととして受け入れることであるが、そのことに左右されない態度を示している。広辞苑 (第七版、岩波書店) によれば、「思い切ること、あきらめること」として紹介されている。間違いなく自分に起こっていることなのだが、それをあれこれと考えずに自分のことだとそのまま受け入れること、そのためには積極的にあきらめることである。フランクルは、先のリトル病の患者の体験からの発見について、「私はリトル病にかかっている。そして、この病気は私に課せられている。私は、この病気から何を生み出すのか、この病気から何を始めるのか、という問いの前に立たされている。」と記述している。この文の病気を「別れ」に置き換えてみると、別れから私たちが問われていることがわかる。すなわち、私たちが別れることを断念できると、その瞬間に問われたことに応えることで、大切なものを発見し、新たな生き方ができるようになるのである。

別れは、これまで示してきたように人間的体験として私たちの存在を揺さぶる。ホスピスケアを地域の中で実践する山崎章郎は、スピリチュアルペインからスピリチュアリティを明らかにしようとする取り組みにおいて、「人間存在を構成する要素のダメージが深ければ、深いほど、その傷がスピリチュアリティに近づき、スピリチュアリティはその特性を發揮する」(山崎 2017:57-58)と指摘する。自分自身の最後を迎えるとき、また大切な人との死別においても、別れは私たちの生を確かなものにしてくれる瞬間であり、新たな旅立ちを可能とするスピリチュアルな体験なのである。

最後に、最近のできごとであるが、別れがお互いの生を確かなものにするのがあった。Rock 'n' Roller の内田裕也のお別れ会で、娘の内田也哉子が父親に捧げた最後のことばである。

Fuckin' Yuya Uchida,

don't rest in peace

just Rock'n Roll!!! (<https://natalie.mu/eiga/news/326568>)

「内田裕也のくそつたれ、安らかに眠るな、ロックンロールしろ」は、スピリチュアルなものが当事者だけでなく、聴いているものに目覚めさせる瞬間であった。

注

- 1) 関係的存在の視点から現象学的に「出会い」を探究した優れた研究として下記のものがある。早坂泰次郎 1991 『『出会い』の心理学』『人間関係学序説—現象学的社会心理学の展開』川島書店 128-143
- 2) 時間が過去、現在、未来へと揺らぐことなく一秒、一分ごとに進むのが時計時間である。それに対して、私たちの体験する時間は、過去へ戻ったり、未来へ飛んだりといろいろな方向に動いている。関係的時間とも呼ぶことができる。詳しくは下記の文献を参照されたい。佐藤俊一 2004 「社会福祉援助技術における生活への視点—生活の連続性を支える基礎的地平の理解」『対人援助の臨床福祉学—「臨床への学」から「臨床からの学」へ』中央法規
- 3) 私たちが日常においてあたりまえに行っている世界に対する態度を指している。フッサール (Husserl,E.) は、自然的態度について一人称単数で語るのがよいとして「現にそこに存在するものとして、眼前に見出すものなのであり、そして、私は、その現実を、それが私に対しておのれをあたえてくれる通りに、実際にまた現にそこに存在するものとして、受け取るのである。」と示している。そのため、私たちは、さまざまな色眼鏡や偏見をもってできごとを見ているのだが、それは避けられないことである。

Husserl,E. 1950, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Martinus Nijhoff, Haag. =1979, 渡辺二郎訳『イデーン I 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』みすず書房 133

- 4) 病いとともにいながら，往復書簡で語り合う免疫学者・多田富雄と社会学者・鶴見和子の出会いは，偶然の出会いであるが，必然の出会いであったともいうことができよう。

多田富雄・鶴見和子 2003『邂逅』藤原書店

- 5) mother tongue という言葉に対して，母国語という訳が見られることがあるが，「国」ということを示すことで，政治的，差別的な使われ方に陥る危険性がある。したがって，母語ということばを使うことを適切である。詳しくは，次の文献を参照されたい。

早坂泰次郎 1999『現場からの現象学—本質学から現実学へ』川島書店

- 6) 先に自然的態度について，注3) に示したが，フッサールは晩年の著作において，学以前の世界としての生活世界において基礎づけることを行っている。具体的には，「自然的な通常の生活世界においては，この多様な主観的なものは，たえず経過してゆき，その経過の中で恒常的かつ必然的に蔽われたままになっている」と指摘する。この蔽われたものを取り去ることが現象学の役割である。すなわち，「これまでの客観的科学が，すなわち世界の基盤の上に立つ学に対して，世界があらかじめ与えられているその普遍的な与えられた方を問う学なのである。」

Husserl, E. 1954, Die Krisis der europaeischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Martinus Nijhoff, Haag. =1974, 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社 205

- 7) 関係性 (relatedness) と人間関係 (Human relations) と区別されずに使われることがほとんどである。人間関係は作ったり，壊れたりするが，関係性とは人間関係の基盤として常にあるのだが，多くの人はそのことを忘れていく。

佐藤俊一 2015「人間関係の現象学—対象化への視点」足立勲編著『臨床社会福祉学の展開』学文社 14-33

- 8) 別れを表す英語としては，筆者は両者の動きを表すという意図から good-bye を考えたが，native の研究者から，別れそのものよりも別れのことばや表示として使われるとアドバイスされた。他には farewell や leave もある。前者は永遠の別れというイメージになり，後者は，自分を主体として去る，離れるということになる。そうした思考の末に，出会いの encounter と同様に，本論で示したい英語表記は無いことに気づき，それならば一般的に使われる separation として，西欧人の自然的態度を示すものと自覚して使用することにした。

文献等

Frankl, V. 1984, Homo Patiens: Versuch einer Pathologie, Verlag Hans Huber Bern. =2004, 山田邦男・松田美佳訳『苦悩する人間』春秋社

Fromm, E. 1976, To Have or to Be? Harper & Row. =1977, 佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊國屋書店

- Husserl,E. 1950, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Martinus Nijhoff,,Haag. =1979, 渡辺二郎訳『イデーン I 純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』みすず書房
- Husserl,E. 1954, Die Krisis der europaeischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Martinus Nijhoff,Haag. =1974, 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社
- 早坂泰次郎 1991『人間関係学序説—現象学的社会心理学の展開』川島書店
- 小林司 1983『出会いについて—精神科医のノートから』日本放送出版協会
- Kübler-Ross,E. M.D. and David Kessler On Grief and Grieving 2005 The Barbara Hogenson Agency. =2007, 上野圭一訳『永遠の別れ』日本教文社
- 佐藤俊一 2015「人間関係の現象学—対象化への視点」足立勲編著『臨床社会福祉学の展開』学文社 14-33
- 山崎章郎 2017「スピリチュアルペインとケア」スピリチュアルケア研究 VOL.1 53-61 日本スピリチュアルケア学会
- 映画ナタリー 内田裕もお別れ会に 1700 人, 内田也哉子の送る言葉は「Fuckin' Yuya Uchida」
<https://natalie.mu/eiga/news/326568>

Separation: Making Our Lives Certain

Shunichi SATO

Many people seek to avoid separations, regarding them as the end of a relationship. However, separation inevitably takes place sooner or later. Thus, our lives are judged by how we handle separations.

In order to tackle the above issue, this article re-examines the conventional idea regarding the time axis between a separation and an encounter, which is considered the prerequisite for a separation, with a particular focus on re-encounters. Then, the article elucidates, using the experiential concepts of separation and loss as keywords, the difference between the natural attitudes of Japanese people and Western people toward separations.

This article regards separations from the standpoint of a phenomenological reduction that brackets the natural attitude, a painful decision to give up, and grounds separations as a basic human experience. On the basis of this, it demonstrates that this process is a spiritual experience that shakes the core of our very existences and makes our lives certain.

Keywords: Re-Encounter, Time Axis, Natural Attitude, Loss, Painful Decision to Give up